

自由討論

●一司会（加々美）では自由討論に入ります。それぞれの発言を3分くらいで、最長でも5分以内でお願いします。溝口さんと鶴見さん、お二人のご報告を受けて、それぞれの方からご自由に討論をいただきたいと思います。また、時間があれば、あとでフロアのほうにも戻しますのでお願いいたします。

では、私から3分ほどお話をさせていただきます。

もともと、中国の近代化、あるいは中国的近代化という言い方のなかで、むしろ近代化の多様な道がかつて語られたことがあります。

竹内に則して言えば、「言葉の不自由を知りつつ、一片真切の言葉を吐く」という文学的な表現が、しかもそれが感情から出発するのだという鶴見さんのご指摘もその点を言い当てていると思います。

竹内の基本的な在り方は、言葉が適切ではないかもしれませんが、自分の目で直接見た人としての中国人という意味で、等身大の中国、あるいは等身大の中国人、別の言い方をすれば、日々の暮らしのなかで喜怒哀楽を示しながら生きている人間をベースに置いて見る視点というものがあります。これに比べて、例えば知識人は観念的な世界でものを語ることができますので、非常に饒舌な話しぶりになりますが、毎日の暮らしのなかで喜怒哀楽の感情のなかで惑いつつ生きている人間には容易には言葉が表れてきません。

しかし、竹内は知識人でありながら、そうした地平に自らがおりていくところからナショナルという問題を考えました。簡単に言うと、中国の抗日戦争は国家を守るような戦いではなく、むしろ、

日々生き、喜怒哀楽のなかで惑う毎日の生きざまを守る戦いであるといった視点が一貫してあったと思います。ですから、国家ではないところへ視点がおりていくのです。このことは、溝口さんが最後にお話しになった地方自治の問題にもかかわることです。

また、鶴見さんが市井三郎さんの話を最後にされました。私は市井さんとは、晩年の十数年間お付き合いいただきました。市井さんに関しては、私の心のなかにすごく大きな疼きのようなものがあります。市井さんは、自分に何の責任もないにもかかわらず大きな苦痛を受けることを「不条理の苦痛」と哲学的に表現をしました。それを人間が1つでも克服する社会をつくり出すこと、それが唯一の進歩の基準であると言いました。

このことも、先ほど言った、日々生きて喜怒哀楽のなかに惑いつつ生きていく人という視点に立ったときに、初めて現れてくる進歩観であると私は思います。

私のコメントはこのくらいにしまして、皆さんのご意見をおうかがいしていきたいと思います。最初に中国の方の孫歌さんからどうでしょうか。では、最初の切り口として孫歌さん、お願いいたします。



●—孫歌 まず二人の大先輩に感謝を申し上げたいと思います。このシンポジウムがこのようなかたちでスタートしたのは、私にとって貴重な体験です。

先ほどのお二人方は、学問の話というより、自分の生きている同時代の歴史とのかかわり方を語っていただきました。私は感動しながら拝聴しました。そして、このようなことを考えていました。

私たち学問をする人間にとって、言葉を使う、そして、言葉しか扱えないというのは一種の宿命なのかもしれません。しかし、その言葉と言葉は実は違うものだということに実感しました。つまり、ただの言葉と、根っこのある言葉、宙ぶり状態の言葉と、命がある言葉というのがそれぞれにありますので、先ほどの二人の大先輩は、生命力にあふれた言葉を与えてくれました。

ですから、竹内好の生涯を見ること自体は、私たちにとって、これから自分の使おうとする言葉のなかに生命力を注入するための行為だと思います。

竹内好は、もう過去の人間になりました。しかし、竹内好の生きていた時代は、過去になっていないかもしれません。その時代とどのように向き合うか、そして、これからの私たちの生き方を考えるときに、やはり竹内を通して、溝口先生の言葉を借りれば、「態度としての方法」を見つけない



ければならないと考えていました。

●—司会 どうもありがとうございます。ほかの方、菅さん、いかがでしょうか。

●—菅 たくさんご存じの方はいらっしゃると思いますが、竹内好には先ほど鶴見さんがおっしゃっていた「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」という文章があります。これを読んだときに、あの竹内好がこんなことを書いていたのかと、実はものすごくショックでした。

たとえば、こんな一節があります。

「歴史はつくられた、世界は一夜にして変貌した。

12月8日宣戦の大詔が下った日、日本国民の決意は一つに燃えた。爽やかな気持ちであった。これで安心と誰もが思い、口を結んで歩き、親しげなまなざしで同胞を眺め合った。口に出して言うことは何もなかった。建国の歴史が一瞬にして去来し、それは説明を待つまでもない自明なことであった。

何人が、事態のこのような展開を予期したろう。戦争はあくまで避くべしと、その直前まで信じていた。戦争は惨めであるとしか考えなかった。実は、その考え方の方が惨めだったのである。戦争は突如開始され、その刹那、吾らは一切を了解した。

東亜から侵略者を追い払うことに、われらはいささかの同意的な反戦を必要としない。敵は一刀両断に切って捨てるべきである。われらは、祖国を愛し、祖国に次いで隣邦を愛するものである。われらは正しきを信じ、また、力を信ずるものである。大東亜戦争は見事に支那事変を完遂し、これを世界市場に復活せしめた。今や大東亜戦争を完遂するものこそわれらである。」

すでにお読みになった方は意外感がないと思いますが、初めて聞くと、「ここまで書いたか」と思われるのではないかと思います。

これは無署名の原稿ですが、1960年代、1970年代に出ていた『中国』という小さな雑誌があり

まして、そこに竹内さんが昔、書いたものとして、復刻されて載ったものです。

「竹内好にしてこんなことを書いたか」という原稿を無署名で、あるところに書きました。すると、それをすぐに竹内さんがお読みになって、それに対する反応がありました。「無知とは恐ろしいものだ。いったいこの筆者は私が左翼だったとも思っているのか」と書いてありました。無知とは私のことです。たしかに「無知」でしょうが、左翼でなければこういうことを書くのか、といえはそうじゃないでしょう。竹内さんの、何か自信にみちた語り口にも、更におどろいたおぼえがあります。

私が竹内さんを読むようになったのは独自の視座からの天皇制批判がある、ということが大きな理由でした。これだけのことを天皇制に対して言っている人が、1941年にはこんなことを言っていたということがものすごいギャップに感じられたのでした。

ところが、竹内さんのなかでは何の矛盾もありません。これがまた、なかなかの驚きでした。

●—**司会** どうもありがとうございました。では、張寧さん、どうぞ。

●—**張寧** 严格来说，作为一个不懂日语的中国学者，是没有资格研究竹内好的。但是，我们现在已经有了一本，就是孙歌女士参与翻译的（近代的超克），虽然收文还不多，但是在中国影响还比较大，一会儿我的发言也会谈到这一点。一个人在他一生中所能受到震动的那种知识、在心灵和思维方式方面给你影响的人，并不多，可能只有那么几位，对我而言，至今也是那么几位，比如说中国的鲁迅，比如说东欧的那么一两位，比如说俄罗斯的一两位，那么还有一位就是日本的竹内好。虽然我读的竹内好的译文比起竹内好一生所写的东西是很少的，但是竹内好在我看来是一个我可以与之进行心灵对话的人。那么从中国的角度来谈竹内好，我的发言可能将涉及到几个问题，我将随后再谈。谢谢大家。

●—**司会** 薛毅さん、どうぞ。薛毅老师，请你谈

谈感想。

●—**薛毅** 去年在上海开了一个关于鲁迅和竹内好的会议。这个会召开之前中国的三联书店出版了孙歌先生主编的竹内好文选《近代的超克》，它引起了学界的广泛注意。因为中国自80年代以来形成了一套现代化的方案，这套方案持续了很长时间，如今这套方案也渐渐暴露出了它的危机，这是需要新的思想资源的时候，也正好是在这个时候竹内好的书在中国翻译出版，引来了广泛的注意。但那个会议也引发了一些讨论，说明中国学界对接受竹内好也有一些疑问，这些疑问表现在以下几个方面：首先最不能绕过去的问题就是竹内好对大东亚战争的态度，这个态度在中国是不可能被接受的，所以很多人由于竹内好的态度进而怀疑他整个思想的价值。第二个疑问是由日本学者带到中国来的，人们发现竹内好和日本的浪漫派有所谓密切的关系，而浪漫派与日本军国主义有联系。由于日本学者在中国如此判断，他的权威性对于不懂日语的很多中国学者而言是无法质疑的。这让不少对竹内好抱有兴趣的人们转而警惕他。第三个疑问，一般而言，就是竹内好对中国的态度有时候会让中国人很开心。当然也会因此而怀疑，他是不是把中国太理想化了。因为竹内好对中国革命进程的态度，对毛泽东的态度和现在中国学界的主流态度完全不一样。我明天可能会针对这些疑问将一些内容。谢谢大家。

●—**司会** ありがとうございました。では、岡山さん。

●—**岡山** 私からは感想と言いますか、先生方のお話をこんなふうに取り取らせていただいたということをお話しさせていただきたいと思います。

溝口先生も、鶴見先生も、竹内好と同時代を生きつつ、それぞれが受け取ってこられた感覚も含めての竹内像というものを提供していただけたので、私のように、生きた年代がほとんど竹内好と重なることのない人間にとって、たいへん貴重なお話だったと思っています。

特に溝口先生が最初に触れられた、「態度としての方法」という問題で、竹内が戦前にやってい

た雑誌のなかに竹内自身のたたかいがあり、そこに新しい世界の切り開きがあったというお話が、重要なことを語られていると思いました。文章としては「態度としての文学」とか、「態度としての方法」ということを今までも読んできたつもりでしたが、そういう竹内のたたかいとか、切り開きということが、例えば、日本人の中国観への挑戦など、その後の一つひとつの彼の仕事の中で何度も掘み直され、また自覚され直してきたことがよくわかりました。

また、鶴見先生が最初におっしゃいました「偏見は楽しい、無知は楽しくない」という言葉、これは竹内の言葉としてこれまで何回も読んできました。また、それを引用された鶴見先生の本のなかでも何回も読みましたが、竹内の文章からしか彼と接することのできなかつた私にとって、今日のお話にありました、「どのような偏見を持っているかを黙って凝視している」という竹内像が、とても存在感と臨場感のあるものとしてせまってきました。そして竹内の持っていた言葉の重みの生じてくる根拠は何だったのかということを考える手がかりとして、私は受け取らせていただきました。以上です。

●—**司会** あと、黒川さんからお話をいただきます。黒川さん、どうぞ。

●—**黒川** 私自身は小説や評論のようなことを書くのが仕事ですが、その傍ら、仲間内で小さい出版活動をしています。ついそちらに夢中になって、本業が後回しになってしまったりします。

昨年、丸山眞男の談話記録をもう一度掘り起こしたいと思い、長い談話記録を自分でテープを起こしたり、資料的な裏付けを取りなおしながら丸山眞男さんの本をつくりました(『自由について』、編集グループSURE)。そこでは、進歩の手だてとしての抵抗、あるいは革命の手だてとしての抵抗、また、反革命の手だてとしての抵抗というものだけでなしに、「抵抗の独自の次元」という丸山さんの考え方が出てきます。

竹内好から丸山眞男が示唆を受けたのは、まさにその点だったことが、私なりに非常によくわかりました。竹内が戦時中、例えば魯迅から見つけたもの、それが自分とくし刺しになって、彼自身が身動きの取れない戦争のなかで、そういう形で現われる。革命の手だて、あるいは進歩の手だてというよりも、身動きの取れないなかでの抵抗、あるいは魯迅の言葉で言えば、「掙扎」というのでしょうか。つまり、もがきのなかで、それを深めていく。竹内が「文学」という言葉から見つけたのは、そこなのだと思います。

鶴見さんの言葉で言うと、そのことが竹内の「沈黙」の深さにつながっている。その辺のことをいろいろ考えました。短く言うとそういうことです。

●—**司会** 溝口さんと鶴見さん、ほかの方々のコメントをお聞きになったうえで補足するようなことはございますか。溝口さんから何かあればどうぞ。

●—**溝口** 自分の先ほどの発言について反省をしているところです。つまり具体的な思想で中国独自の近代を語るべきではなくて、もっとわかりやすく、つまりこういうことです。16、17世紀ぐらいから盛り上がっていた民間の力が、やがて清王朝の制度自体を倒すところまで生育したプロセスが、私は独特の近代だと思います。簡単なことで、その二百数十年の間に蓄積が高まっていき、最後に清王朝を倒した、それが辛亥革命です。

●—**司会** ありがとうございます。では、隣の鶴見さん、どうぞ。

●—**鶴見** 溝口さんの話を聞いて、その態度が言葉になっていなくても態度が方法なのです。そこから思想史に対するとき、竹内さんの主張は、何を言ったかを要約することではなくて、なぜ、このことを言ったかが問題だという関心の持ち方です。アジア・ナショナリズムを考えるときに、それが重大だということです。なるほどと思いました。

ということは、私なりにずらして見ると、ベト

ナム帰りのアメリカ兵は、今、アメリカ合衆国のなかにいて口を閉ざしたままです。その沈黙のなかに批判の方法があるのです。また、イラクから帰ってきたアメリカ兵は黙っていても沈黙のなかに方法があるのです。

それは、先日、TBSの「NEWS 23」というテレビ番組で、筑紫哲也がアメリカで取材したアメリカ兵が断片的に言っていることのなかに、アメリカ批判というか、USAという国に対する批判がトータルに出ていました。だから、既にUSAのなかにアジアはあるのだということを感じました。

筑紫哲也はコメンテーターとして敏感だなと思いました。そこに指を触れていました。「ああいうものがあるのだな」という感じを持ちました。それは驚きました。

●—司会 ありがとうございます。それでは、フロアのほうに戻したいと思います。

はい、松本健一さんが遅れて来られました。松本さんにコメントを求めようと思ってもまだお聞きになっていないので、松本さんのコメントは次の自由討論のときをお願いすることにします。

フロアのほうで質問などありましたら手を挙げてください。遠慮なくどんどん手を挙げてください。どうぞ、非常に単純なことでも構いません。少し難解な話だったかもしれませんが。はい、どうぞ。マイクを回してください。

●—質問者 島根県立大学から来ましたウ・シンと申します。先ほどの先生方のご報告を聞かせていただきまして、大変よい勉強になりました。ありがとうございます。

先生方のご報告で触れられたところでもありますが、アジアの伝統、むしろアジア固有のものを強調して、生かして、将来に向けて普遍性のあるものをつくり出して西洋的な近代化を相対化しようという姿勢は十分にわかります。しかし、アジア地帯、まず中国、日本、韓国、この3国の間にも結構いろいろ異なっているところがあります。



これをまず考えておく必要があるのではないかと考えています。

つまり、伝統文化においてもアジアのなかにいろいろ複雑な要因が混ざっているのです。西洋、ヨーロッパと太刀打ちする前に、まずアジア共同体というか、知的共同体のなかにあり得る可能性をまず取り出す必要があるのではないかと考えています。質問ではないのですが、感想です。以上です。

●—司会 最後に言われたのは東アジア共同体のことですか。

●—質問者 そうです。

●—司会 ほかに。あちらをお願いします。まとめて3人ぐらいからお聞きしてください。

●—質問者 今の中国の方と似た問題提起です。大東亜戦争が始まったときの竹内さんの宣言を初めて聞いたので大変ショックでした。それと、最後に鶴見さんが言われた「無言のベトナム帰り」「無言のイラク帰り」に、何か非常に大きな可能性を感じさせられるのですが、その先のストーリーが続いてきません。

たまたま私が持っている竹内好の本は『日本のアジア主義』ですが、無言のアジア人というか、言葉でない態度とか、何かそのようなことをいろいろ言われて刺激的でした。

タイトルに「日本・中国・世界」と書いてありますが、私は明日参加できませんので、これからの話題のなかで、アジアと世界を結ぶ何かヒントを、もう少し発言いただくと大変ありがたいです。すみません。

●—**司会** お二人とも、「アジア」という言葉についての、むしろ具体的なアジア、態度としてのアジアというように、アジアでも、先ほど溝口さんが言われたように、アジアの具体相というものにおいてくるやり方をするのか、しないのか。東アジア共同体について、先ほど、ウさんが質問されたのも、どちらかというとは具体相の問題です。

溝口さんは実際、中国的近代化について、一定程度具体相に触れられたわけです。その問題が、片一方で態度としての、あるいは方法としてのアジアというものと、具体相としてのアジアというものが、どのように触れ合うのかという問題がそこにあると思います。

どなたでも結構です。では、お二方、順番にご発言ください。

●—**質問者** 昨日、ブッシュ大統領と小泉首相の会談がありました。それで、鶴見先生におうかがいしたいのですが、1957年、1958年当時、安保反対のオピニオン・リーダーとして竹内先生と相照らして、われわれ若い者を当時引っ張っていただきました。今日は、その時代考証などの話が具体的にあるかと思いましたが、当時のエピソードなどまたお話し願えればうれしいです。

●—**司会** はい、わかりました。では、もうお一人どうぞ。

●—**質問者** フリーランスのジャーナリストのモリと申します。今日の鶴見先生がご指摘の「北京日記」を、私も全集のなかで一番面白く読んでいます。実は2回くらい読んでいます。

当時の留学制度の実態とか、例えば、佐藤春夫が北京に来たり、阿部知二が北京に行ってササッと取材をして『北京』という小説を書いたときの偏見かもしれませんが、いろいろな見方とか、先ほどお話が出ましたカフェの従業員（女給さん）と大恋愛をして、ものすごく大甘な詩をつくったりしているところがとても好きです。

それで、私などは大衆文化に興味があるので、つつい非常に風俗的に読んでしまったりして面

白がってしまうのですが、このような読み方のなかから、思想家としての源泉がうかがえるのかどうかということ、このような読み方でいいのかということ、うかがってみたいと思います。岡山先生なり、鶴見先生に少しその辺のことをお答えいただければと思います。ありがとうございます。

●—**司会** では、一応そこで区切ります。ご報告いただいたお二人から、一つひとつ正確に答えていくのは少し面倒な面があるかもしれませんが、具体相としてのアジアと、方法としてのアジア、態度としてのアジアの触れ方、その辺のかかわり方の問題と、それから、もう1つが、60年安保闘争のときの鶴見さん、竹内さんとの仕事、実際は70年安保闘争まで、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）のほうが大きいかわかりませんが、その辺りのところのご質問があったということ、あとは「北京日記」についてです。

どちらからでも結構です。少しお話しいただければと思います。では、今度は鶴見さんから簡単にどうぞ。

●—**鶴見** 私は、遠いところからしか問題に近づくことができないのですが、1960年の安保のあと、私は大学を辞めてメキシコに行きました。その直前にTBSから竹内さんとの対談を申し込まれました。そのプロデューサーがとても面白い人で、辻一郎という人でした。彼には著書がありません。

竹内さんが承知したので、私も承知せざるを得ませんでした。竹内さんは話すこと、演説することがすごく嫌いです。そのあと、竹内さんがテレビ局からもらった報酬で晩飯をごちそうしてくれました。そのときに竹内さんが「僕がなぜおごっているか、わかるかい」と、辻一郎プロデューサーに聞きました。「わかりません。今、あげた報酬をすぐ使っちゃうんですか」と答えると、「それは、しゃべることから解放されたからだよ」と、解放の報酬なのです。そういうふうに竹内さんの構造は成り立っているのです。

そのときに、「メキシコに行ったら、自分が行ける土地があるかどうか探してきてくれ」と、私は言われました。竹内さんはナショナリストだと見られていますが、この日本のなかにはいなければいけないとは思っていないのです。メキシコに行ったら、魯迅の翻訳をそこでずっとやって日本で出版していけば暮らせるのです。メキシコに行きたいと思ったのは、日本の暮らしのなかの煩わしさがあるからです。だから、私に「どこへ行ったら暮らせるか見てきてくれ」と言うのです。それもびっくりしました。

だから、竹内さんのナショナリズムは、どのような性格のものか、外から伝わってくる気がします。どうしても日本でナショナリズムというと、安保のときでも「ここにいなきゃいけない、ここに」という、そういうものではないのです。それが1つです。

安保のときに、全日本学生自治会総連合（全学連）のほうは、ものすごく敗北したと思って、大変に暗い気持ちになっていましたが、竹内さんは明るかった。私はそちらのほうなのです。

なぜかという、自分の気持ちに推して考えると、それまで生きてきた同時代の日本について、竹内さんの評価は非常に低いです。竹内さんが私の前に現れたときに、「こんな暗い日本によくいられるね」と言いました。私はとてもびっくりしました。

私はものすごく暗い気分ですずっと子どものとき



から生きてきた。それが背景にあるから、安保のときにあれだけの運動があらわれたのに驚いた。女子学生が圧死しました。日本人に、こういう力があるのかと思ってびっくりするのです。

だから、竹内さんも私も60年安保闘争のあとは、明るい気分できて全学連から非常に批判されました。つまり全学連のほうは、リーダーの清水幾太郎を含めて、もっと日本を高く評価していたのです。

私たちは、日本のインテリはみんな駄目だという考え方です。昭和4、5年からあります。もう駄目。ことに東大を出た人は駄目です。

竹内さんは、まったく私の知らない人でした。黙っているのです。対していても、ほとんど黙っていました。それで何か言うと、「これはうまいよ」ということしか言わないのです。うまいものを食べるのが好きな人でした。だから、どこの弁当がうまいとか、そういうことは言うのです。私が考えている知識人とはまったく違う人で驚きました。人の沈黙に聴いているのです。だから、一致したのは、あの安保闘争のときです。

私は、日米安保には反対ですが、同じように負けて終わるだろうと思っていました。

相撲の千秋楽をゆっくり見て下宿に帰ってきたら、竹内さんが辞めたという記事が出ていました。そのときに、自動的に私は「おれは辞めなければいけない」と思いました。というのは、私は独り者なのです。竹内さんは家族を持っていて大学を辞めてしまうのです。私は国立大学の助教授ですが、竹内さんの辞めることの中に、当然、自分が辞めることが含まれていると考えて、すぐに辞表を出しました。そういう関係です。

●一司会 なるほど、長い間、東大の先生をおやりになった溝口先生、何か一言ありますか。

●一溝口 急に振らないでください。先ほどの、日中、それがいきなり世界に行くのではなくて、アジアを媒介にもう1つのステップをというお話ですが、5、6年の間、日中知能共同体という運

動を起こしていました。それで、日本と中国の知識人の間で、自分たちの国に対して持っている忌憚のない批判的なものを出し合おうということでやりました。中国人の場合は日本語に翻訳し、日本人の場合は中国語に翻訳して進んでいくわけです。あるとき韓国の方々が、「なぜ日本と中国だけでやるんだ。われわれもこの趣旨に賛成だから入れてください」ということになりました。そうすると、シンポジウムが日・中・韓になると、言葉の問題でもものすごく面倒になってしまうのです。

一方、別のときに、EU（欧州連合）の人たちとシンポジウムをやりました。そうすると結局は英語です。ドイツ人もフランス人も日本人も英語です。英語で1つの共同空間ができます。これはおかしいですね。

孫歌さんが言われましたが、母国語で話すアイ

デアと、英語に翻訳して話すアイデアは違ってしまい、自分たちでなくなってしまうというのです。ヨーロッパでやるときは、自分たちでなくなってしまうのです。アジアでやるときには、これはまた別の意味で、自分たちがどこにいたらいいのか、という問題があります。難しい問題です。

●一司会 アジアというのは、地政学的な意味での具体的な概念ではないです。

ちょうど時間が来ているようです。討論は、まだ拡散していますが、お二人のご報告は、特に言葉にならない言外の部分に面白い部分がたくさんあったと思います。

取りあえず第1セッションの報告と討論をこれで終えて、続いて第2セッションに入ります。もう一度、報告をされた鶴見先生と、溝口先生に拍手をお願いします。